

開かれた歴史と歴史を開くこと ——ブローデルとリクールの対立から見える 「歴史」と「開かれ」の問題——

松井 信之*

はじめに

本論文は、歴史を理解するとはどういうことなのか、そこに何が伴っているのかを問うことである。このとき本論では、アナル学派の泰斗フェルナン・ブローデルの歴史記述に対して、哲学者ポール・リクールが投げかけた批判を通じて、歴史を理解することの意味を問い返そうとするものである。とはいえ、筆者は歴史学を専門とする者ではなく、政治哲学を専門とする。したがって、本論稿は、歴史記述をめぐる問題に差し出される一つの学術的な理解の更新を意図しておらず、むしろ、歴史記述を読む側の「理解」を問題とするものであると同時に、その「理解」が歴史に接続するときに何が生じるのかを問うものである。その際、本論文全体を通じて、表題にある「開かれた歴史」とはオープン・エンドな歴史的過程を指し、他方で、その「開かれた歴史」を行為や理解の場としうるという可能性を「歴史を開くこと」を指す表現として使用する。このとき、ブローデルが「開かれた歴史」を示した一方で、リクールは「開かれた歴史」の先行条件として「歴史を開くこと」を位置づけており、この点から、「歴史を開くこと」と「開かれた歴史」を同時に考えていくことが重要である。このことを以下で示す。

本論は、4節からなる。第1節では、ブローデルとリクールの間に横たわる歴史記述をめぐる対立を貫成人の『歴史の哲学』の議論を批判的な参照軸

* 立命館大学国際関係研究科研究生

としたうえで、歴史記述の前提として、歴史に開かれる契機が存在することをリクルの議論を通じて示す。第2節では、歴史を理解するための条件として歴史に開かれることと歴史を開くことが伴われていることを明らかにする。第3節では、歴史に開かれる契機とは何かについて、リクルの議論だけでなく、グローバル化時代の文脈において現在が歴史に開かれているとは何を意味するのかという問いに取り組む。最後に、第4節では、開かれた歴史のなかで歴史を開くことが何を意味するのかを、再びリクルの議論を主たる参照軸として過去と現在の「実存可能性」という点での等価性という観点から探求する。

第1節 歴史を記述することと関与すること

ブローデルの議論の考察の前に、彼の歴史記述と対立する歴史記述を概観しておきたい。端的に言えば、それは、「出来事」に基づく物語としての歴史記述である。この点、ベネデット・クロウチェの「あらゆる歴史は現在史である」[クロウチェ 1952:17]という言葉が象徴的である。現在における関心から物語られるかぎり、過去は歴史として理解されうる。また、ヘーゲルは、『歴史哲学講義』において、「なされたこと」と「なされたことの物語」——それに加えて、国家秩序の確立を目的として発展するという目的論——という諸側面を歴史の領域に読み込みながら、歴史の理解には私たちの物語が不可欠であるということを示している [ヘーゲル 1994 (上):108-9]。

だが、この「なされたこと」と「なされたことの物語」の区別は、近代歴史学の創成期においては曖昧であった。ドイツの歴史家レオポルト・フォン・ランケは、一次資料に基づく「事実の厳密な記述」としての歴史叙述を追求し、歴史学の科学的な制度化がそれ以降各国で模倣され、19世紀の歴史学の科学的な地位は、確固たるものとなった [イッガース 1996:第1章]。だが、歴史学は、ランケによって「なされたことの物語」を徹底的に排除する学知

であるとされた一方で、道徳的集合体としての国民国家を軸にした世界史像を示すための「物語」でもあったのであり、そのことが例えば京都学派の歴史哲学に影響を与えたことも事実である [佐藤 2009 : 19-20]。

また、そうした 19 世紀を通じた歴史学の制度化の過程と並行して、社会的な関心から社会の細部の経済活動や宗教活動、あるいは集会的な心理を焦点化する「社会科学としての歴史」の潮流が特に 19 世紀後半から形成されてくる [イッガース 1996 : 第 2 章]。ドイツにおいては、カール・ランプレヒトの『ドイツ』における脱政治的な文化を経験的に記述する歴史記述をめぐって論争が巻き起こり——この論争にはマックス・ウェーバーも参加している——、フランスではエミール・デュルケームが歴史学に対する社会学の科学性の優位というかたちで「歴史」を社会の経験的領域に接合し直そうとする動きが見られた [イッガース 1996 : 27-31]。だが、イッガースによれば、この動きによって、歴史の客観的な意味と政治的な領域の対応関係が相対化されたとはいえ、特にウェーバーの社会学的手法に代表されるように、「明白に確認できる発展の道筋は存在するのであり、この発展論のあるところ、かならず、歴史学的な社会科学の必然性が生まれる」という信念は共通の前提として共有されたのである [イッガース 1996 : 37]。

こうした流れは、ブローデルが属するアナル学派の方向性を決める前提にもなっている。リュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックらが 1929 年に創刊した『社会経済史年報 (Annales d'Histoire économique et sociale)』(1946 年『年報 : 経済・社会・文明』、1994 年『年報 : 歴史と社会科学』に改名)に因むこの学派は、その内部に方法論的な差異を含むとはいえ、「国家、経済、宗教、文学、芸術など」のような既存の歴史学で特権的に扱われてきたそれぞれの領域を、「ひとつの大きな文化の構成部分」と見なすという点で共通である [イッガース 1996 : 47-8]。こうした研究関心の境界線の解体は、20 世紀後半に世界的な影響力を持つことになる [イッガース 1996 : 58]。イッガースの評価によれば、アナル派の方法論には、近代以前の社

会史に内在するダイナミズムを数量化するというような科学的客観性への信頼が確固としてある一方で、西欧近代が特権的に有するとされた科学や客観性の価値への疑問視もその中核に含まれる [イッガース 1996: 58-9]。

つまり、歴史を理解することと客観的な過程（なされたことの継起）との緊張関係があるのだ。この前提に対して、特に1970年代のポストモダニズム思想の潮流のなかで、「なされたこと」の客観的記述が不可能であるという問題意識が前景化する。むしろ、歴史の理解は、私たち自身の関心や認識の枠組に拘束された「なされたこと」の物語でしかないのではないか。ロン・バルトやヘイドン・ホワイトなどは、歴史記述を物語的な散文と見なしながら、言語哲学的に解析・類型化することで、歴史家の文学的な関心に従って歴史的「事実」が物語られるとした [White 1973, 1987, ホワイト 2001; バルト 1987; Ankersmit 1989; イッガース 1996]。バルトやホワイトなどは、歴史学の「なされたこと」の記述における科学性をラディカルに否定する。あるいは、アーサー・ダンターは、客観的法則性を歴史に見出そうとする「実体論的歴史哲学」に「分析的歴史哲学」を対置し、客観的な歴史の記述を目指す前者が不可能であり、過去の出来事の意味が後続する諸々の出来事との関係において語られることで、歴史を絶えず語られ直されるものであると主張した [Danto 1985=1989]。イッガースが言うように、歴史と物語の関係への注目の高まりは、歴史における人間の地位の相対化の潮流の後に、人間の位置づけを再度歴史の内部で見出そうとする動きを表すものである [イッガース 1996: 130-31]。私たちが過去に向き合うとき、共時的な空間における私たち自身の関心や認識の枠組に不可避的に規定されながら、過去との連続性を絶えず再構築し続けているのである。アンカーシュミットなら、そうした物語を、過去の出来事と記述の客観的一致を目指す「認識論」に対して、物事との結びつきを（再）構成する「表象」と呼ぶだろう [Ankersmit 2001: 12]。あるいは、野家啓一ならば、「『物語る欲望』に取り憑かれた動物」である人間は、「実際に生起した出来事」を「人間的時間の中に組み込」み、

「歴史的出来事としての意味」を与える「物語行為 (narrative act)」を通じて、歴史を理解していると言うだろう [野家 2005 : 9, 16]。

しかし、それによって問題が解消されるわけではない。歴史が物語られる対象でしかないとすれば、実際に過去が存在していたと言えなくなるのではないか。私たちは、単に現在の「表象」のなかで「歴史」と呼ぶものの理解を形成しているだけであり、過去が現在を規定すると言えなくなるのではないか。以下で考察対象となるブローデルとリクルの間の対立点もこうした問題関心の形成の途上で提出されたものとして理解しなければならない。はじめにブローデルの歴史記述について見ていこう。

ブローデルは、私たちの短期的な時間感覚のなかで形成された関心からでは決して捉えることのできないような歴史的な時間の運動を提示する。それは、近代に至る過程をグローバルに普遍的なものともみなすことに反対することを意味する。そのために、ブローデルは、歴史を長期・中期・短期の時間軸に分節化し、それを包括する「構造」という堅固かつほとんど変動することのない包括的な時間の層を見出そうとし、そのことによって短期的時間に属するとされる個人史的・伝記的な視点から物語られ、「出来事」の因果関係を軸にする歴史記述を排除したのである。彼は、まず歴史学が対象とする時間に「極めて長い持続」(「地理学的時間」)と「短い時間」(「出来事史」)という時間の両極性を見出す [ブローデル 2005: 195]。これらの時間の深層と表層の間に「社会的時間」が見出される。深層の「地理学的時間」は、「ロング・デュレー長期持続」、動かないも同然の歴史などとも言い換えられる。中層の「社会的時間」は、「緩慢なりズムを持つ歴史の時間層であり、「変動局面」とも呼ばれる。私たちの関心から短期的な時間的連鎖で物語られる歴史的出来事も、「地理学的時間」や「社会的時間」の長期的観点から見れば、かなり複雑な因果関係のもとで生起するものであることになる。しかし、伝統的に歴史学は、「出来事的な時間」という短期の時間層のみに焦点を絞ってきた。ブローデルによれば、短期の視点から語られる歴史は、歴史の長期的な変動

を理解することができない。このとき、ブローデルは、歴史の深層・中層・表層の時間軸は相互に絡まり合いながら、総体的に「自分自身の流れ (courant) に引き込むことのできない出来事をすべて否定し、(…) 遠ざける」と指摘している [Braude 1966 (II) =2004 (V): 194=520]。同時に、この歴史の反出来事的なダイナミズムは、「構造」と呼ばれる。このようにブローデルは、歴史の「全体的なもの」を描き出すために、長期変動のなかで進行する緩慢な変化を詳細に記述しなければならないと考えるのである [ブローデル 2005: 29]。

ブローデルからすれば、近代化を必然化する視点は、政治的出来事を出来事の総体の中軸に没反省的に位置づけてしまっている。出来事に対して、「構造」は、短期的な政治的関心から自律的に作動していると考えられる時間のレベルである。哲学者の貫成人は、『歴史の哲学』において、今日において妥当する自律的な作動としての歴史を「複雑系的歴史システムの理論」を通じて明らかにしている。「複雑系」とは、内在的な秩序変動を示す概念である。複雑系システムにおいては、外在的な要因——進歩やそれに類する目的——に依らずに、多様な要素ネットワークの結びつきの流動的な解体や創出を通じて新たな全体秩序の形成や既存の秩序の崩壊が導かれる。このとき新たな秩序の形成は、ネットワークの再編を通じて、新たな要素が既存の秩序内部に付け加わることで、最終的に全体秩序の変動に波及することで実現される。このメカニズムは、「創発 (emergence)」と呼ばれる [小林 2000: 68-73]。そして、貫の「複雑系的歴史システムの理論」は、「創発」の観点とブローデルの全体史を接合しようと試みるのである [貫 2010: 150]。

貫の議論は、先に見たような近代的価値を無反省に前提とする歴史記述に対して、前近代社会の分析に数量的な方法を適用するアナル学派の歴史記述を、近代をも射程に収めるかたちで、自然科学に由来する自律的メカニズムと接合して、再構成しようとするものである。このとき、歴史的事象としての「干拓事業や戦争、革命や外交、内乱など」は、「当事者の計算を超え

たメカニズム」としての「創発」という観点から見直される〔貫 2010:221〕。「創発」の観点から社会史を記述し、理解することは、現在の私たちの関心に一方的に拘束される歴史記述から私たちを自由にする。つまり、歴史的変動は、自然環境や社会構造の長期的な緩慢さのもとで展開するのであり、この過程の上に近代世界システムも位置づけ直されるのでなければならないのである〔貫 2010: 第7章〕。

では、ブローデルの経済社会史の記述と「創発」を接合することは、どのような歴史の見方に資するか。貫の言葉では、「歴史において生まれた虚構は、歴史において姿を変える」ということが決定的に重要である〔貫 2010: 220〕。「過去への唯一の接近回路が物語的歴史記述」〔貫 2010: 221〕であるという歴史への理解は、多かれ少なかれ、過去と現在の間の結びつきを必然的なものとし、そのことが歴史への見方を狭める要因となってしまう。しかし、私たちは、不均衡な「創発」の時間の流れのなかに生きている。したがって、私たちの関心を前提とする虚構としての「物語」は、長期の歴史の流れにおいては脆いものであり、「創発」の時間との緊張関係を孕まざるをえない。私たちの現在を取り囲む「環境や気候、技術や資源、市場や通商ネットワーク、金融などによって制約される生産能力、心理的束縛、各地の文明や政治勢力」〔貫 2010: 144; ブローデル 2005: 200-201〕なども、「構造」の「創発」による変動を免れない。言い換えれば、私たちが自明視している環境、制度、信念、政治的問題などに取り囲まれた関心から歴史を物語ることは、結局、歴史理解に恣意性を持ち込むことになってしまう。

その際、貫は、ブローデルの歴史記述に対立する物語論者としてリクールを挙げている〔貫 2010: 143 以下〕。そこでの論点は、「構造」という歴史記述と「物語」という歴史記述のどちらが歴史を理解する際に適切かということである。無論、貫は、前者を支持し、後者を批判する。そのとき重要なことは、ブローデルの歴史記述が「出来事史に還元しえない構造の全体」、つまり、「物語論が想定するのとは別個の歴史メカニズムを示す」ことを試み

たということである [貫 2010 : 147-48]。

しかし、歴史学の 19 世紀から 20 世紀の流れを概観した際に見たように、ブローデルとリクールの対立を「構造」と「物語」——あるいは、客観性と主観性——の対立と同一視すべきではない。実際、リクールも、政治的な主体化形成の過程であるという意味での「出来事中心主義」の歴史記述がアナール学派によって乗り越えられたことを認めている。彼によれば、ブローデルの歴史記述は、「出来事の煙のようなはかなさに対立する 持続という岩のような堅固さ」、「真の変化の偉大なる遅さ」の水脈に到達した [Ricoeur 1983 (I) = 1987 (I) : 146ff=174ff]。しかし、たとえ「構造」のレベルを認めたとしても、フッサール以降たびたび強調されてきたように、私たちの世界の経験は、特定の見方にすでに拘束され、枠づけられたものであるということも同時に考えなければならない [Cf. Zahavi 2003: 19]。

貫の描き出した二項対立化では、客観性と主観性の対立の回帰を許してしまう。むしろ、リクールは、現象学から解釈学の系譜のうえて、歴史を理解することの前提としての物語について問うていると考えるのが妥当である。彼によれば、「構造」という反物語的な歴史記述すらも、例えば、「長い 16 世紀」における地中海世界の繁栄の「はじまり」と「終わり」を物語的に設定せざるをえない [Ricoeur 1983 (I) = 1987 (I) : 313=375]。いくら数量的な分析をミクロな範囲で徹底しようとも、特定の時間的範囲を設定する語りの視点が伴われる。貫のリクールへの批判点は、「構造史は出来事史に寄生する」という点に向けられている [貫 2010 : 143-44]。貫の議論に基づくと、一方で、ブローデルは自律的に存在する次元の歴史を焦点化し、他方で、リクールは歴史を理解するための物語を強調しているということになる。

しかし、以下で論じるように、リクールは、自律的に作動する歴史よりも、歴史が開かれる契機に接するということ、歴史を理解することの中心に位置づけているのである。この観点からみれば、リクールの批判は、貫が問題とするように、「構造」と「物語」の対立ではなく、ブローデルの「構造」の

歴史記述でさえも、物語性を中核に持つという条件から逃れられないことを明らかにするものである。

彼がアリストテレスの悲劇論を「物語」という概念のモデルとして提示するのもそのためである。リクールによれば、アリストテレスの「筋立て (muthos)」についての議論は、「調和が不調和を償うすぐれて言語的な活動である」[Ricoeur 1983 (I) =1987 (I): 55=57]。一連の「筋立て」を通じて、「不調和の調和」が実現されるが、それこそ「悲劇のモデル」である [Ricoeur 1983 (I) =1987 (I): 65=74]。しかし、アリストテレスは、悲劇の筋立ての本質に「不調和の調和」を超えた「完結性」や「統制」を重視している。これに対して、リクールは、諸々の出来事間の不調和を語ることで「受苦」を共有するという点に悲劇の筋立ての本質が求められなければならないと言う。言い換えれば、出来事間の結びつきは、一貫した統一性を持たず、それを理解しようとする側になぜこのような出来事が起きたのか（起きてしまったのか）という問いを喚起する。つまり、不調和に気づいたとき初めて、人は、「筋立て」を理解しようとする。リクールの言葉では、「筋は不調和なものを調和したものの中に含ませることによって、理解可能なものの中に感情的なものを含ませる」[Ricoeur 1983 (I) =1987 (I): 68=77]。つまり、「筋立て」において重要なのは、物語の一貫性ではなく、不調和な出来事が一貫性の理念に挑戦するなかで「感情的なもの」と絡まり合ったなぜという問いが聴衆に喚起されるからである [Ricoeur 1983 (I) =1987 (I): 65-67=74-75]。

リクールがそうした不調和の契機の例として中心に位置づけるのは、ナチスによるホロコーストである [Ricoeur 2000=2004-2005]。リクールの歴史の哲学についてのヘイドン・ホワイトによる評論によれば、こうした表象不可能かつ比較不可能な歴史的出来事は、認識論的な記述の対象という意味ではなく、私たちの倫理を触発するという意味で「一回的 (singular)」である [White 2007: 240]。つまり、リクールにとって、「物語」が歴史の本質である理由は、不調和な過去の出来事が現在の私たちの感情を揺るがすからであ

る。

この意味で、ブローデルとリクールの間には、「構造」と「物語」という単純な対立ではなく、「歴史」に関与すること以前に歴史を記述することが可能か否か、そして、歴史に関与するとは何を意味するかをめぐる理解の相違があると考えた方が適切である。要するに、歴史を記述する前に、歴史に関与するということが、人間が歴史という時間に関われるという契機が存在するという点をリクールは問題にしているのであり、ブローデル的な「創発」としての歴史もその契機を内包していると考えられるのである。

第2節 変化に関われた歴史と歴史記述という開かれた場

先に見た貫の議論から見えてこないのは、歴史の作動に巻き込まれるということと歴史に関われることの重なり合いである。貫によれば、リクールの哲学は、ブローデルの「構造」の歴史記述の成果に「寄生」せざるをえない[貫2010:145]。しかし他方で、ブローデルの歴史記述もリクールの視点に拘束されなければ歴史の理解に資することはない。そこで、本節では、歴史記述に先行する歴史に関われる契機とは何かを問うなかで、ブローデルとリクールの間に横たわる対立軸と見えたものを解きほぐしたい。

第1節で見たように、ブローデルの歴史記述は、貫によって「複雑系的歴史システム理論」として再構成されることで、そのオープン・エンドな過程としての特徴が強調され、近代をもその記述の射程に収めるかたちへと発展させられる。ブローデルや貫にとって歴史とは、「環境や気候、技術や資源、市場や通商ネットワーク、金融などによって制約される生産能力、心理的束縛、各地の文明や政治勢力」[貫2010:144;ブローデル2005:200-201]などの総体を変動させていく開かれた過程である。また、その変化の過程の中にある社会的諸力は、社会変動を能動的に生み出す政治的な主体性を付与されていない。その代わりに、ブローデルは、歴史の変動の長期性のもとでの

「文明の基盤」からの抵抗に焦点をあてる。

「それ〔文明〕は、花を咲かせたとき、一時的な、非常に複雑な創造をしたとき、経済的な勝利を収めたとき、そして短期的に、社会的試練を受けたとき、死をまぬがれない。しかし文明の基盤 (soubassements) はそのまま残る。基盤はいささかも破壊できないものではない。だが、少なくとも、基盤は我々が考えるよりもはるかに堅固だ」[Braudel 1966=2004 (III) : 111-112=200]。

「基盤」は、文化的な集合体の「慣習的行動 (la routine)」を支え、「刺激、衝動、規範、様式、あるいは義務」などの「日常性 (la vie)」の源泉である [Braudel 1985=2009 : 13=15-16]。また、この意味で、「基盤」は、「大地に結びついた文明の抵抗力 (la force de résistance de civilisations attachées au sol)」である [Braudel 1966=2004 (III) : 109=197]。

ブローデルが挙げる例として、16世紀のヨーロッパ世界の敵対的な関係を生み出したカトリックとプロテスタントの間の対立がある。それぞれの地域の人々にとって、

「それぞれ独自の心があり、宗教的に言えば、それぞれの魂 (âmes) があった。(…) プロテスタント教会は、オーストリア・アルプス山脈、〔フランスの〕中央山塊、フランス・アルプス山脈、バアルン地方のピレネー山脈にまで、いくつか強力に足を伸ばした。しかしどこでも、結局は、プロテスタント教会は地中海の境界で挫折する。ラテン世界は、その拒否をより一層特徴的にする数々の躊躇と熱情 (élans) のあとで、結局は、『山の向こうの (d'outre monts)』宗教改革にノーと答えた」[Braudel 1966 (II) =2004 (III) : 102=183]。

このように、歴史的な変動に対する「基盤」からの「抵抗力」は、歴史的な地理を一色に塗りつぶすことを許すことはない要因として位置づけられている。

また、個人のレベルで見ても、例えば、プロレタリアートのように、その意識に跳躍的な主体化の契機が訪れるとは考えられない。むしろ、個人は、長期的な変動のもとで微弱に動揺し続ける者として描写される。例えば、ブローデルが描写する地中海世界の長期変動の歴史地理学のなかで、フェリーペ2世の人間としての生涯とは何であったろうか。ブローデルがフェリーペ2世の死を描写する箇所ではそのことは示唆されている [Braudel 1966=2004 (V) : 512-514=178-82]。フェリーペ2世は、エル・エスコリアル宮殿にて敗血症に苦しめられた末、1598年9月13日に死去する。ブローデルは、その死を、英雄的な君主の死ではなく、一人の人間の生涯の終幕として理解しようとしている。「孤独な個人としての君主」として見れば、彼には、「複数の肖像 (portraits)」があり、「君主の粹」を「はみ出して」しまう [Braudel 1966=2004 (V) : 513=180]。フェリーペ2世は、地中海世界の緩慢な変化の波のなかで、その「長く力強い人生を通じてずっと変化し続けた」 [ブローデル 2004 : 346]。だが、歴史的意義を実現する英雄へと変化したのではなく、戦乱が勃発し、郵便、命令書、商品が行き交う16世紀の地中海という地理空間のなかで、君主として、実務家として、信仰者としての「複数の肖像」の間を絶え間なく揺れ動き続けたのである。

集団生活の「基盤」という点でも、一人の生涯という点でも、決定的な歴史的価値を有するような変動をもたらす特権的な(集合的)主体は存在しない。たとえば、何をもって自由なのか、その意味は、長期にわたって同じであることはなかった。「フランスという集団の自由」や、16世紀後半のスペイン帝国の自由、フェリーペ2世の自由の間には、深淵な溝がある。「いずれの自由も、私には、ひとつの小島 (une île étroite)、ほとんどひとつの牢獄のように見える」 [Braudel 1966 (II) =2004 (V) : 192-93=519]。ブローデ

ルが記述するオープン・エンドな歴史においては、それぞれの自由の意味を信じることで行動に結びつけようとする「主体」は、「牢獄」の中にいるようなものなのである。

だが、そのオープン・エンドな歴史の過程を誰が理解するのか。歴史が「複雑系」だとしても、その開かれた歴史の様相を理解しようとする人間の行為の領域を想定しなければならないのではないか。この点で、リクールの物語の哲学が開かれた歴史の過程に歴史を開く契機を対置するものと述べたことが重要となる。

リクールは、アリストテレスの『詩学』に依拠して、「ある出来事が他の出来事のゆえに (dia) 起こる」と、「ある出来事が他の出来事のあとに (meta) 起こる」ことの対比においては、前者に優位性があると指摘する [アリストテレス 1997: 1452a18-22; リクール 1987 (I): 76]。先に指摘したように、ここで「出来事」とは、受苦を伴う不調和な出来事である。また、ここで「ミメシス」という概念は、不調和な出来事についての伝承可能な物語の技法という意味で使用されている。くわえて、アリストテレスは、「始めと中間と終りをもつ」出来事の継起においては、単純な継起ではなく、幸福から不幸への「逆転」が中間において生じることが、「筋立て」をその終りへと導いていくと言う [アリストテレス 1997: 1450b 26, 1452a16]。こうして、不調和な中間の出来事は、出来事の全体のなかで「なぜ」という問いからでなければ前景化しえない共通の問いの空間を生み出す。つまり、問いが喚起されることによって、歴史的現実のなかに巻き込まれながら歴史を開きうる地点に立たされるのである。

リクールによれば、このなぜは、「歴史家の思考の志向性」を規定する。また、「その志向性によって歴史学は間接的に人間行動の領野とその基本的時間性を思念し続ける」 [Ricoeur 1983 (I) = 1987 (I): 139=161]。つまり、歴史家は、歴史へと開かれていると同時に、歴史を開きうる。たとえ、ブローデルのように、歴史的な事実に対する「数量的分析手段」をいかに洗練した

としても、それは「構造を、最善の場合は変動を、さらに構造の終りを、明るみに出すための媒介物にすぎない」[Ricoeur 1983 (I) =1987 (I):152=187]。あるいは、「数量的分析手段」の洗練が自己目的化すれば、ハンス・ケルナー (Kellner 1989) がノースロップ・フライに基づいて「メニッポスの風刺」との類比で批判したように、膨大な情報量のなかでその歴史記述がどのような理解を読者の側にもたらずかという視点が抜け落ちてしまう [Kellner 1989: 162; Ankersmit 2001: 3]。

言い換えれば、ブローデルのように開かれた歴史のミクロな記述でさえ、歴史を開くための解釈の実践を伴っている。リクールは、解釈の実践の一つとしての歴史記述の構造を「ミメシス」という概念を通じて理論化しようとしているが、解釈とは第一に実践である。ハンス・ゲオルグ・ガダマーが『真理と方法』の「第二版まえがき」で記しているように、「理解 (Verstehen)」は、人間存在 (現存在) の逃れえない条件であり、かつ、「理解」には、「歴史性 (Geschichtlichkeit)」が伴われている [ガダマー 1998: xii]。また、人間は、先行的に「理解」を通じて、世界を切り取り、経験の意味について「判断 (Urteil)」をくわえている [ガダマー 2008: 436-37]。その「先入見 (Vorurteil, 先行判断)」がなければ、ブローデルの描く開かれた歴史もない。だが、このことは、歴史が私たちの解釈に依拠して語られるという歴史の物語論だけを帰結しない。むしろ、「理解」や「先入見」は、「個人が下す判断」ではなく、「われわれが歴史に属する」という自己を超えた生の現実を表現する概念なのである。

第3節 「開かれた歴史」の前提としての「歴史に開かれること」

ここまでの議論から、ブローデルとリクールの間には、歴史のオープン・エンドな自律的な作動と、歴史を開く契機との強調点の相違があるということが明らかとなる。本論文は、前者の歴史の様相についての記述に妥当性が

あるとしても、後者から考えていくことが重要であるとする立場である。そこで本節では、歴史に開かれる契機とはどういうことであり、次節では、歴史を開くとはどういうことなのかについて考察していく。

ここまでの議論から言えば、歴史は現在の関心から語られるということ以上に、あらゆる現在は、現在を超え出ているという点で歴史的であると考えなければならない。エマニュエル・レヴィナスは、「現在はある歴史を有しているが、現在は歴史ではない」と、第1節で見たクロウチェの言葉とは異なる、過去と現在の結びつきを超えた現在の実存的な特異性について言及している [レヴィナス 1999:246]。「現在が持続するとすれば、(…) 現在は遺産の恩恵に浴したことになる。しかるに、[実存するという意味での] 現在は自己から出来する」 [レヴィナス 1999:247 括弧内は筆者]。私たちは、レヴィナスの言葉にある「現在」の二重性を考えてみる必要がある。すなわち、過去と未来の間に位置づけられる現在と、歴史という時間の流れを再編成することを可能にするという意味での「自己を起点」とする現在の二重性である。そして、リクールが『時間と物語』において論じたように、前者の意味での現在から時間を捉えてしまうことが、アウグスティヌスにアポリアを突き付けたのであった [Ricoeur 1983 (I) =1987 (I) : chap.1]。すなわち、時間が未来から過去へと流れ去るというイメージで時間を捉えることは、現在に何の「広がり (distentio)」も認めないことにつながり、過去と未来との結びつきをも解かれてしまうのである。この問題は、現在を過去と未来の起点とみなすことによって、乗り越えられるとは言わないまでも、現在に過去と未来の結びつきが見いだされるなかで取り組みうるものとなる。つまり、現在は、単に過去から未来への時間の通過点なのではなく、その時間的継起のイメージを再編する過去と未来の起点という意味での「広がり」を持っている。くわえて、リクールによれば、アリストテレスの『詩学』は、過去と未来に対して「広がり」をもつ現在の様相が「筋立て」のなかで表現されることを示しているという点で、現在の過去と未来への結びつきが理解される物

語の構造を論じた書物であると言える [Ricoeur 1983 (I) = リクール 1987 (I):chap.2]。つまり、現在は、過去と未来の間にある単なる通過点でも、歴史から完全に自由な起点なのでもなく、歴史から断絶しつつも、歴史を引き寄せ、また、歴史に引き寄せられた「広がり」をもつ「起点」なのである。

この意味で、レヴィナスの現在の二重性についての見方をも、現在の「広がり」という観点に結びつけて理解することが可能である。このとき、レヴィナスやリクールは、現在における受苦やその受苦を取り囲む状況に歴史を開く潜在性を見出している。レヴィナスは、過去・未来に対する現在の自由が、逆説的に自己の歴史に対する「責任」を開くと指摘する [レヴィナス 1999: 251]。言い換えれば、現在の歴史性は、現在から過去・未来に「広がり」を持つ「責任」において生み出される。あるいは、『実存と実存者』においては、「瞬間 (instant)」について論じるなかで、現在の意味が浮き彫りになっている。それによれば、「瞬間はひとつの塊でできているのではなく、分節化されている」 [Levinas 1990=1987: 16-17=18-19]。瞬間とは、「分離された瞬間 (instants séparés)」ではない [Levinas 1990=1987: 155-56=149]。瞬間は、同定不能な「存在」をあたかも「存在者」として同定可能であることを前提とするような時間の量的な自然化を拒む契機である。こうした自然化された時間の典型は、「経済の時間」と呼ばれる [Levinas 1990=1987: 153-56=147-49]。その時間は、私たちの経済活動において前提とされている時間である。すなわち、「照明装置、自動電話、鉄道と道路との連携といったシステム」のような「道具の多重の組み合わせが機械の本質の特徴である。それがいくつもの瞬間を集約する。そして速度を生み出し、欲望の性急さに呼応する」 [Levinas 1990=1987: 155=149]。この瞬間のアトミスティックかつ高速の集積のなかで、過去からの現在の労苦は、未来において償却される——この期待が「経済の時間」であり、「代償の時間」を支えている。つまり、機械的な「経済の時間」に搦めとられた「瞬間」は、経済活動を中心として形成された「分節」のなかで私たちの歴史認識を形作るのである。

また、「経済の時間」の物語は、「責任」と緊密な関係にある「瞬間」をあらかじめ放棄した歴史認識を私たちに差し出す。レヴィナスの認識に基づけば、「経済の時間」の物語は、「代償」を私たちに示しはするが、「救済の要請 (exigence du salut)」を欠落させている [Levinas 1990=1987: 157=150]。ここで救済の意味とは、「労苦 (peine) の瞬間」に立ち戻ること、したがって、労苦が現在において「復活 (résurrection)」することで、過去の労苦をも未来に託される「救済の要請」のなかへと包み込むということである。

労苦と償いという主題は、リクールの物語の哲学の主題にも通じる。そのことは、彼が「生きられる時間と普遍的時間とのあいだの結合子 (connecteurs)」について語る際に前景化している [Ricoeur 1985 (III) =1990 (III):153=189]。「生きられる時間 (le temps vécu)」とは、実際に諸個人が前反省的に経験する時間であり、「普遍的時間」とは、様々な「生きられた時間」を統合するレベルで見出される私たちにとって共通の時間である。端的に言えば、労苦とは、この「結合子」を現在において形成する試みであり、また、歴史とは、いわばその結合子の結合である。

例えば、その「結合子」を端的に示す議論として、「世代連続 (la suite des générations)」が挙げられる。リクールによれば、歴史家にとって「世代連続」とは、「暦法的時間 (le temps calendaire)」と「古文書、史料、痕跡」に並んで、過去と現在の関係への問いに答えるための必要条件の一つである [Ricoeur 1985 (III) =1990 (III):153-183=189-228]。つまり、歴史家は、時代区分(暦法的時間)に基づいて、資料を駆使し、時代ごとにどのように人々が生きていたのかを研究する。このとき、「世代連続」の概念が重要なのは、「普遍的時間」に通じる「生きられた時間」を焦点化するからである。アルフレッド・シュッツによれば、「世代」という社会的集団は、他者との間接的な社会関係を指す。社会に生きる人間は、「同時代者を匿名的な過程として把握する」がゆえに、「世代」という概念を理解することができるようになる [シュッツ 1980:230]。このとき、特定の世代に属する個人は、同

時代的な集団についての緩やかな共通理解を参照しながら経験を意味づける。他方で、各世代間で共有される同時代性は異なるがゆえに、世代間の共通理解に全くの同一性を想定することはできない。この世代間の共通理解のギャップは、世代間のディスコミュニケーションの要因となる。この世代間の間隔を過去へと広げていけば、誤解の可能性は、同時代よりもさらに大きくなる [シュッツ 1980:243]。この意味で、歴史を通じて私たちが理解しようとするのは、「直接に経験される〈われわれ〉」ではなく「われわれの警戒を大きく免れてしまう匿名者 (anonyme)」なのである [Ricoeur 1985 (III) =1990 (III): 165-66=199]。

だが同時に、この世代間に横たわる亀裂は、歴史の理解にとって必須のものである。言い換えれば、私たちと異なる「普遍的時間」のもとで、「生きられた時間」のなかにいた人々との比較を通じて、私たち自身の現在の「生きられる時間と普遍的時間とのあいだの結合子」が浮かび上がってくる。こうして比較を続けることが歴史の理解の形成に結びつく。確かに、過去の人々と現在の私たちの間の「生きられる時間」と「普遍的時間」は異なっているし、それを結びつける想像力のあり方も異なる。しかし、同時に、私たちが理解しようとする過去は、私たちの「結合子」と共鳴しうるものでもある。というのも、「世代連続」とは「歴史の能動者の連鎖」でもあるからである。「世代連続」を通じた歴史の理解は、「生きられた時間」のなかにいる人々を「やがて死者の位置を占めるようになる」存在として記述し、そうした人々が固有の「生きられた時間」のなかで残した「獲得したもの (l'aquis) の伝達と、新しい可能性の開始との交叉から生じてくる『連鎖 (enchaînement)』」を把握することを意味する [Ricoeur 1985 (III) =1990 (III): 163=199]。こうして、「歴史の能動者の連鎖」のなかの歴史の理解は、「共通の運命への前反省的参与」を伴うと言えるのである。

つまり、現在は、過去と断絶しながらも、過去の人々とともに共通の運命を担っている——この逆説を理解しなければならない。世代ごとの「生き

られた時間」の間には多くの場合、誤解や衝突、葛藤が避けられない。カール・マンハイムは、それを「弁証法」と呼んだ〔マンハイム 1976:186-87〕。この「弁証法」においては、前世代との断絶や緊張関係に強調点が置かれる。共通の運命への参与は、この断絶を出発点とする。リクールの言葉では、前世代との緊張関係は、「文化の新しい担い手の絶えざる到着」によって生じ、そのことが「ある同一時点での年齢階層の層化 (*stratification*)」を生み出しながら、文化の「老化」を「補償」していく〔Ricoeur 1985 (III) =1990 (III):164=200-201〕。この「弁証法」のなかで「結合子」が再形成され、葛藤を必須の社会的条件としながら歴史的社會が形成される。

ところで、世代的な連続の内部で形を変えながら反復的に存在してきた葛藤や緊張関係、またそこに伏在する結合子の結合という観点から歴史を描き出すという要求は、第二次世界大戦以降の歴史記述においてますます高まってきたと言える。リン・ハント (2014=2016) に基づいてその要求の高まりを整理すれば、伝統的の制度からの解放 (近代化理論)、階級の理論 (マルクス主義) という近代産業社會を定義づけようとする潮流から、近代化以前の社會内部のミクロな差異を描き出す記述 (アナール学派)、さらには、人種やジェンダーという点から社會内部で周縁化されてきた集團の歴史 (アイデンティティの政治) へと向かう潮流のなかで一つの社會内部の差異や多元性を描き出す方向へとシフトするなかで、歴史の結合子の結合とは何かという問題が浮き彫りになってきたのである〔Hunt 2014=2016: chap.1〕。

アイデンティティの政治に至ると、過去と現在の間の「生きられた時間と普遍的時間の結合子」をめぐる単純な比較は許されないことになる。だが、注目すべきことは、ハントがこれら4つの歴史記述のパラダイムが内包する共通の問題点として、「自己と社會との関連性」について、社會が自己を制約する一方で、自己が社會を (程度の違いはあれ) 能動的に変えることができるという相矛盾する命題を解決することなく放置してきたと考察している〔Hunt 2014=2016:78-9=85-6〕。つまり、これまでのほとんどの歴史學は、

「構造」による社会的自己の制約というモチーフに依拠しており、自己が社会へと向かう[、][、][、][、]労苦の問題とそれに伴う社会と自己の緊張関係から目を背けてきたということである。

ここまでの議論からすれば、ハントの批判は、リクルの「生きられた時間と普遍的時間の結合子」という関係性を理解するということと結びつく。なぜか。すなわち、これまでの歴史記述において捨象されてきた「自己と社会との関連性」に着目することは、新しい視点のもとで世代の「弁証法」を歴史の理解の中心に位置づけ直すことを可能にするからである

ハントは、自己と社会の間関係についての分析を組み込んだ「ディープ・ヒストリー (Deep History)」と呼ばれる歴史記述を新たなパラダイムとして発展させることの重要性を論じる。「ディープ・ヒストリー」は、ダニエル・ロード・スミールによれば、石器時代という「先史」として位置づけられてきた過去から現在の長期的な結びつきを遺伝学的・神経学的な集合的行動様式と文化の形成の相互作用から明らかにしようとするものである [Smail 2008]。それに対して、ハントがとりわけ着目するのは、「情動 (emotion)」に基づく行動と社会との結びつきである。

「情動は、個人の心と身体の蝶番として機能する一方で、また個人をより広い社会や文化に結びつけることにもなる。情動は個人のレベルで無意識的な身体的反応をもって始まり、自覚的な感情へと一連の過程を踏んで発展していく。社会の内部における多様なコミュニティは各々が情動表現を統制する異なる方法をもっており、社会と文化も情動表現において多様となる」 [Hunt 2014=2016 : 110=118]。

このように情動は、自己と社会を結びつける媒介項である。ハントの情動についての議論は、基本的にアントニオ・ダマシオによる研究に依拠しているのであるが、それは、ヒトの脳の進化の過程という長大な時間を扱う射程を

収めるものであり、この点で、地球の誕生から地理的・環境的な変動を視野に収めようとするいわゆる「ビッグ・ヒストリー Big History」¹⁾のパラダイムとも部分的に重なり合う²⁾。だが、ハントの議論に限ってみた場合、「ディープ・ヒストリー」は、進化生物学的な社会的協力関係の進展が社会構造の変動と絡まり合い、そのことが人間を含めた地球の全体的な歴史記述の客観性を担保するというよりも、「過去の記憶、可能な未来への構想や記憶、言いかえれば、歴史のないしは物語的な感覚の継続的な再活性化を基盤としている」という意味で、人間社会が歴史に不可避的かつ無意識的に関与しているというレベルでの歴史性と結びつく [Hunt 2014=2016 : 110=119, Damasio 1994=2010]。

たとえば、ハントは、近代社会と個人を結びつける歴史学の成果の例として、17世紀のロンドンにおけるコーヒーへの需要が諸個人の刺激を求める欲求の拡大とともに高まっていった過程を挙げている。コーヒーの需要の高まりは、社会のなかでの自己意識の拡大と並行していた。コーヒーを飲むという行為の拡大は、「コーヒーハウスに陣取ること、統治者の政策に不満を述べることのような期待と行動様式」と絡まり合って生じたのであり、自律性や自己決定などの政治的な主体性は、消費文化において求められる刺激と切り離して考えることはできない [Hunt 2014=2016 : 141=152-53]。したがって、このコーヒーハウスの例は、ハーバーマスが論じた公共性を担う社交の場としてのサロンや応接間に体现された社会的な「文芸的公共圏」における、政治的に啓蒙された「公論」の形成という事態とはやや異なっている³⁾。なぜなら、自己意識の拡大は、理性の行使というよりも、物質的・経済的な条件との相互作用のなかで拡大する情動に基づいて生み出されたものであったからである。

このように、情動を組み込んだ歴史記述は、消費活動、コミュニケーション活動、情動などの間の重層的な作用に着目し、ある時代の公共的な価値や認識が複合的な過程から生み出されることを明らかにしようとする。ここで

は、歴史の目的をプロセスの終局に置くことは慎重に回避される。

ハントの議論に従えば、私たちは、情動のレベルですでに新たな物質、商品、サービス、制度、社会関係などからの影響に取り囲まれながら、自己意識の変容と社会的な意識を生み出していると考えることができる。私たち自身の能動性によって意識的にそうしていると言うよりも、事物のネットワークの内部で受動的でありながら、意味を生み出さざるを得ないように触発されているという意味で能動性が生み出されるのである。一言でいえば、「ディープ・ヒストリー」における「主体」とは、社会的ネットワークのなかで意味づけへと方向づけられているという意味で、能動のパス（active pathos）を内包する存在が想定されているのである。

歴史の長期変動という点でも、すでに歴史を生きている存在が歴史に開かれる局面があるということが言える。たとえば、歴史社会学者の山下範久は、『現代帝国論』（2008）において、「ピュシス」＝「自然の秩序」と「ノモス」＝「作為の秩序」の対比において、両者の境界線が自己準拠的に（再）分割される過程が人類史であると指摘する〔山下2008：248-49〕。その自己準拠的な境界線の再分割の契機において、「主体は、その不断に変わりゆく構造のなかに自己を埋め込み直す（…）」〔山下2008：249〕。本論文の議論からすれば、そうした境界線のゆらぎ、あるいは、「ピュシス」が「ノモス」に転化する局面は、「現在」が未来に開かれた時点であると言い表すことができる。あるいは、私たちは、こうした歴史記述の例を水野和夫——彼自身は歴史学者ではなくエコノミストであるが——著作に見て取ることができる。彼は、ブローデルの『地中海』に基づきつつ、17世紀頃のイタリアの低金利と経済状況と現代のグローバル経済の低金利状況と経済状況の比較を通じて、「新しい可能性の開始」とも言いうるポスト資本主義社会——水野の議論では定常社会——への展望を議論すべきことを主張している〔水野2012〕。彼の議論は、「定常社会」へ向かう「現在」の趨勢が妥当性を有するような論拠として、過去と現在を比較したうえで、〈17世紀イタリアの低金利→新

大陸へと重心を置いた近代資本主義経済の形成→現代資本主義化における低金利→定常社会〉という物語的な記述を通じて、ブローデルの歴史記述を歴史への理解のために語り直すものである。ここでは金融資本主義の発展の帰結として、「ピュシス」と見なされていた制度的秩序が欠陥のある「ノモス」へと転化する事態が描写されており、それによって私たちが長期変動の歴史に開かれる局面にいることを明らかにしている。このことから、歴史に開かれる契機とは、「現在」の特異性が浮かび上がる社会的な場において、言い換えれば、自己意識と社会意識の新たなかたちで社会のある領域と情動が絡まりあうなかで生み出される場において、「現在」が現在を超え出る可能性を掴むことなのである。

第4節 「欠けている現在」から歴史を開くこと

以上のように、歴史に開かれる契機とは、歴史に還元しえない「現在」——そこでは、新たな可能性が開かれている——を把握することでもある。さらに、そうした理解の仕方は、歴史が一貫した過程であることに疑いを持つことと矛盾するものではない。なぜなら、現在の特異性が理解される場において、歴史へと開かれるからである。だが、歴史に開かれた「現在」から、私たちは、歴史の過程をどのように開いていくことができるか。これが本節の問いである。

リクールは、歴史を理解するという営みについて、それが「公的な時間」を共有しているという前提のもとで行われる間接的な「解釈」とであると論じる [Ricoeur 1985 (III) =1990 (III):166-68=203]。またそのとき、リクールにとって、その解釈の根本条件とは、人間が死ぬということである。「歴史において死は、すぐれて両義的な意義をおびており、そこでは、各人の死の個人性 (*intimité*) を指示するのと、生者が死者に入れかわることの公的な性格を指示するのとがまじりあって」おり、「これら二つの指示が合流する

ところに、匿名の死 (mort anonyme) がある」[Ricoeur 1985 (III) =1990 (III) :169=205]。言い換えれば、個人の死は、公的であることで匿名なものとして把握される。また、匿名の死はつねに、ある時代の「公的な時間」のなかで、死んだ者の生きた時間とは何であったのかという「解釈」と表裏一体である。

この死の匿名性の解釈を通じて、歴史を開くということの意味を垣間見ることができのではないか。『記憶・歴史・忘却』において、リクールは、前節で見た「世代連続」に加えて、「反復 (répétition)」という概念を歴史の理解の条件に位置づける。ハイデガーは、(キェルケゴールの実存哲学を哲学的な背景として)「反復」を「受け継がれた実存可能性」を伝承することと定義する [ハイデガー 2013 (4):264]。また、ハイデガーの定義に対して、リクールは、「反復」を「過去を未来に向かって再び開く (…) 力」であると規定する [Ricoeur 2000= 2005 (下) : 494-95=141]。つまり、過去に生きた人々の「実存可能性」は、現在の私たちに手渡されている可能性でもある。このことを再び開示しうるところに現在の特異性と「反復」の重なり合いが見出される。

ここで、現在は、過去において開かれていた可能性によって再び未来へと開かれる。また、その新たな可能性の局面において、つまり開かれた未来を前にして、現在の生は、匿名の死者たちが生きたときのように受苦する。「反復についての省察は、昔の死者もかつては生きていたのであり、歴史学は何らかの仕方では彼らが〈生きて - いた〉(avoir-été-vivants) ことに近づく、という考えを掲げてさらに一歩進むことを許す」[Ricoeur 2000= 2005 (下) : 495=141-42]。「昔の死者」たちは、その「現在」において、また未来を前にして受苦する存在だったのではないか——このような時間的存在として匿名の死者たちが〈生きて - いた〉ことを把握しようとすることは、死者たちをまったく不在の者として扱うことを禁ずる。

それゆえ、歴史を理解し、開くという動機は、リクールが別の個所で論じ

るように、「～とは何かという問い (question quoi?, what?-questions)」ではなく、「～とは誰か?という問い (question qui?, who?-questions)」を本質的に伴っている。逆に、「何か起こるものという概念に関係づけて、行動の記述上の地位を決定することに、(...) 専念」することが、「誰がの問いの潜在的な消去を含み、ついにはそれを隠蔽するようになる」[Ricoeur 1990=1996: 76-77=81]。この隠蔽とは、すでに去った人々を不在の者と扱うことと同義である。

また、ハンナ・アーレントは、『人間の条件』において、「誰?」という同様の問題に取り組んでいる。彼女にとっても、この「誰」は同定不可能であるが、他者との関係において決定的に重要な問いとして位置づけられている。すなわち、「活動と言論の中で示される人間の『正体』(“who”)は言葉で表現できないために、人間事象をこのように『なに』(“what”)として記述すること] 取り扱うことは、原理上、不可能である」[アレント 1994:295]。また、アレントにとっても、この「誰か」は、行為しながら、受苦する者である。

「活動者は常に他の活動者の間を動き、他の活動者と関係をもつ。だから活動者というのは、『行為者』であるだけでなく、同時に常に受難者である。行なうことと被害を蒙るということは、同じ硬貨の表と裏のようなものだからである。そして、活動によって始まる物語は、活動の結果である行為と受難によって成り立っている。しかし活動の結果には限界がない。なるほど活動は、それ自体新しい『始まり』である。しかし、活動は人間関係の網の目という環境の中で行なわれる。この環境の中では、一つ一つの反動が一連の反動となり、一つ一つの過程が新しい過程の原因となる。このために、活動の結果には限界がないのである」[アレント 1994: 307-8]。

関係性のなかで「始まり」を担うこと、あるいは担ってしまうこと、それは、行為が連鎖する社会関係において「受難」を生み出す。しかし、そのことによって、受難者は、「何」として忘却されるのではなく、また「何」として記憶されるのではなく、匿名でありながら、「実存可能性」を示す「誰か」として、私たちとともに未来の前に立つ不在の存在者なのである。明らかに、アレントの洞察は、先の「反復」の議論と結びついている。「反復」とは、不在の受難者＝「誰か」とともに、新たな可能性の前に現在するというのである。匿名＝誰か、受難、「始まり」、「実存可能性」は、歴史への理解を、記憶と忘却の挟間へとたえず投げ返すのである。

さらに、驚くべきことに、この「反復」への関心は、ブローデルさえ共有していたと考えられるのである。『地中海』では、フェリーペ2世だけでなく、様々な匿名の「誰か」が登場しては、「構造」が彼らを乗り越えていく描写が展開される。その描写は、行為と受難の密接な関係を垣間見せるものだ。ブローデルは、『地中海』を「彼〔歴史家〕は、(…)生活のなかで最も具体的で、最も日常的で、最も不滅であるもの、最も匿名の人間に関わるもの、そのような生の源泉そのものへと向かっていくのである」と締め括っている [Braudel 1966=2004 (V): 520=194]。ここには、歴史を開かれたものとして見たうえで「反復」を捉える理解が披瀝されていると言えないだろうか。そうであるとすれば、ブローデルの歴史記述においても、不在の者がたえず回帰していると言えるのである。

だが、この不在の者の回帰は、決して過去と現在の同質的連続性を意味しない。確かに、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』における「無名戦士の墓」の挿話は、かつて存在した生者＝死者を現在の空間に包摂するという「国民的想像力」を象徴している [Anderson 2006=2007: 9-10=32]。だが、リクール（や彼が依拠するミシェル・ド・セルトー）にとって、「墓」を建てる歴史記述（「歴史のエクリチュール」）という行為は、「現在において満たすべき場所」[セルトー 1996:131]を見出すことでもあるが、裏

返せば、それは現在における欠如を示す行為である。「歴史とは、『欠けている現在』のまわりに形成されるこの『言説』」である[Ricœur 2000= 2005 (下) : 476=124]。「欠けている現在」を過去との同質性に還元してしまうことは、現在に現れている欠如——不在のものの回帰——を物語的な暴力によって隠蔽することと同義だろう。「欠けている現在」は不在の存在者のたまり場であり、私たち自身の時間の「結合子」を把握するための比較と対話の場は、そこに隣接している。したがって、歴史を開くためには、現在の秩序を変容可能性に開くことが必要である。また、その変容可能性は、「欠けている現在」に語りかけるなかで私たちの歴史性を解釈することによって開かれてくるのである。

おわりに

本論文は、歴史記述の妥当性をめぐる議論から出発して、歴史を理解するとは何を意味するのかをブローデルとリクールの間にあるとされた対立点を掘り下げることで明らかにしようとしてきた。以上で明らかになったことは、歴史を理解する際の前提として求められるのは、現在を歴史との関係において開かれた行為の可能性の場として理解するということである。この意味で、過去は、完全に過ぎ去ったものではなく、様々な行為の可能性と受難が生み出された領域として、同時に、現在との比較を通じて私たちの行為の可能性を導き出す領域でもある。私たちが過去に見出すのは、現在と異なる緊張関係のなかで形成された文脈だけでなく、私たちにとっての未来を開く「実存可能性」でもある。歴史を理解しようとするこのうちには、現在の行為のかたちを変えるという可能性に開かれていることを含む。しかしこのとき、現在は、歴史を通じて、過去を忘却した場でも、統合的な記憶の場でもなく、過去に生きた不在者が回帰する場としての「欠如」を抱える場として理解される必要があるのである。

注

- 1) Big History という語は、デヴィッド・クリスチャン (Christian 1991) が提示した概念である。フレッド・スパイアーによれば、それは、先史／有史という既存の歴史学における時代区分を超えて、地質学的な時代区分の延長線上で人間社会の歴史を再構成する歴史記述である [Spier 2010:1; Hesketh 2014]。
- 2) その例として、ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』(Harari 2015=2016) を挙げることで。それに対して、近著 *Homo Deus* (Harari 2016) は、遺伝子工学を通じて人間集団が環境的な制約を打破する能力を得るまでの過程とその帰結を論じるものである。
- 3) 「サロンやクラブや読書会における民間人の論議は、生活の必要に迫られた生産と消費の循環に直接支配されず、むしろ生活の必要からの解放というギリシア的な意味で『政治的』な性格を、その単に文芸的な形式 (…) においても具えていたので、ここでフマニテートという理念が (…) 成熟することができた」 [ハーバーマス 1994:216]。

【参考文献】

- アリストテレス (1997) 松本仁助・岡道男訳「詩学」, 『詩学・詩論』, pp.7-229.
- アレント, H. (1994) 志水速雄訳『人間の条件』 筑摩書房.
- イッガース, G・G. (1996) 早鳥瑛訳『20世紀の歴史学』 晃洋書房.
- ガダマー, H.G. (1986-2012) 轡田収ほか訳『真理と方法: 哲学的解釈学の要綱』 法政大学出版局.
- クロオチェ, B. (1952) 羽仁五郎訳『歴史の理論と歴史』 岩波書店.
- 小林道憲 (2000) 『複雑系社会の倫理学: 生成変化のなかで行為はどうあるべきか』 ミネルヴァ書房.
- 佐藤卓己 (2009) 『歴史学』 岩波書店.
- シュッツ, A. (1980) 森川真規雄・浜日出夫訳『現象学的社会学』 紀伊国屋書店.
- ド・セルトー, M. (1996) 佐藤和生訳『歴史のエクリチュール』 法政大学出版局.
- 貫成人 (2010) 『歴史の哲学: 物語を超えて』 勁草書房.
- 野家啓一 (2005) 『物語の哲学』 岩波書店.
- ハイデガー, M. (2013) 熊野純彦訳『存在と時間 (1-4)』 岩波書店.
- ハーバーマス, J. (1994) 細谷貞雄・山田正行訳『〔第2版〕公共性の構造転換: 市民社会の一カテゴリーについての探究』 未来社.
- バルト, R. (1987) 花輪光訳『言語のざわめき』 みすず書房.
- ブローデル, F. (2004) 浜名優美監訳『地中海をめぐって ブローデル歴史集成 I』 藤原書店.
- (2005) 浜名優美訳『歴史学の野心 ブローデル歴史集成 II』 藤原書店.
- ヘーゲル, G.W.F. (1994) 長谷川宏訳『歴史哲学講義』 岩波書店.

- ホワイト, H. (2001) 海老根宏・原田大介訳『歴史と物語』リキエタスの会.
- マンハイム, K. (1976) 鈴木広訳「世代の問題」, 石川康子・鈴木広・川崎嘉元・朝倉景俊訳『マンハイム全集 3』, pp.147-232.
- 水野和夫 (2012) 『世界経済の大潮流』太田出版.
- 山下範久 (2008) 『現代帝国論：人類史の中のグローバリゼーション』日本放送出版協会.
- レヴィナス, E. (1999) 合田正人訳「時間と他なるもの」, 『レヴィナス・コレクション』筑摩書房, pp.231-299.
- Anderson, Benedict. (2006) *Imagined Communities: Reflection on the Origins and Spread of Nationalism*, revised ed., Verso. (白石隆、白石さや訳『創造の共同体：ナショナリズムの起源と流行』2006年、書籍工房早山).
- Ankersmit, F.R. (1989) "Historiography and Postmodernism", *History and Theory*, Vol.28, No.2, pp.137-153.
- (2001) *Historical Representation*, Stanford University Press.
- Braudel, Fernand (1966) *La Mediterranee : et le Monde Méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Paris: Armand Colin. (= 浜名優美訳『地中海 (I~V)』、2004年、藤原書店).
- (1985) *La Dynamique du Capitalisme*, Paris: Flammarion. (= 金塚貞文訳『歴史入門』、2009年、中央公論新社).
- Christian, David (1991) "The Case for 'Big History'", *Journal of World History*, 2 (2), 223-238.
- Damasio, Antonio R. (1994) *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*, New York: G. P. Putnam's Sons. (田中三彦訳『デカルトの誤り』2010年、筑摩書房)
- Danto, A. (1985) *Narration and Knowledge*, Columbia University Press. (河本英夫訳『物語としての歴史』1989年、国文社)
- Harari, Yuval Noah (2015) *Sapiens: a Brief History of Humankind*, New York: HarparCollins. (柴田裕之訳『サピエンス全史：文明の構造と人類の幸福 (上・下)』2016年、河出書房新社)
- (2016) *Homo Deus: A Brief History of Tomorrow*, London: Harvill Secker.
- Hesketh, Ian (2014) "The Story of Big History", *History of the Present*, 4 (2), pp.171-202.
- Hunt, Lynn (2014) *Writing History in the Global Era*, New York: W.W. Norton. (長谷川貴彦訳『グローバル時代の歴史学』2016年、岩波書店)
- Kellner, Hans (1989) "Disorderly Conduct: Braudel's Menippean Satire," in Kellner, *Language and Historical Representation*, Madison, Wise.
- Levinas, Emmanuel (1990) *De L'existence à L'esistant* (2e éd), Paris: J. Vrin. (西谷修訳『実存から実存者へ』、1987年、朝日出版社)

- Ricoeur, Paul (1983-1985) *Temps et Récit* (I-III), Paris: Seuil. (久米博訳『時間と物語 (I ~ III)』、1987-1990年、新曜社。
- (1990) *Soi-Même comme un Autre*, Paris Seuil. (= 久米博訳『他者のような自己自身』、1996年、法政大学出版局)
- (2000) *La Mémoire, L'histoire, L'oubli*, Paris: Seuil. (久米博訳『記憶・歴史・忘却 (上・下)』、2004-2005年、新曜社)
- Smail, Daniel Load (2008) *On Deep History and the Brain*, University of California Press.
- Spier, Fred (2010) *Big History and the Future of Humanity*, Chichester : Wiley-Blackwell.
- White, Hayden (1973) *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*, Johns Hopkins University Press.
- (2007) “Guilty of History?: The *Longue Durée* of Paul Ricoeur”, *History and Theory*, vol.46, 233-251.
- Zahavi, Dan (2003) *Husserl's Phenomenology*, Stanford University Press. (工藤和男, 中村拓也訳『フッサールの現象学』2003年、晃洋書房)